

鉢形城について

‘17/04/06

鉢形城は戦国時代の代表的な城の一つです。地理的には、関東平野が甲州・信州・上野さらには越後に接するところなので、ここは北辺の守りの役割を担っていました。

戦国時代の始まりを「応仁の乱」（1467～1477年）と考えることが多いです。しかし北条早雲が伊豆国を手に入れた1492年とする説があることも触れておきます。伊豆国を落とした行為が、この時代のキーワード「下剋上」にあたるからです。戦国時代の終結は、豊臣秀吉による小田原城を落城（1590年）と考えることにします。

1 足利幕府の関東統治機構と崩壊

足利幕府は、関東地方を治めるために「鎌倉公方」（くぼう）という出先機関を設置します（1349年）。初代の鎌倉公方は、足利尊氏の次男でしたから京都との結びつきは強かったと思われます。しかし、次第に独立性を強めたため、ついに4代鎌倉公方は、足利幕府とその意向を受けた「関東管領」によって自害させられ、鎌倉公方は一旦滅亡します（永享の乱）（1439年）。鎌倉公方は、もともと「お公家」なので、統治の実務は「関東管領家」＝越後の上杉家があたりました。ときに鎌倉公方の中央権力への野望を関東管領が身を挺して諫めることもあったようです。

4代鎌倉公方には遺児・足利成氏がいて、結城氏などの地方豪族がこれを担ぎ、足利幕府の意向に関係なく五代目鎌倉公方が誕生し、後にこれが「古河公方」と呼ばれるようになります。

五代目の足利成氏は、自害した父の仇であるとして1454年関東管領・上杉憲忠を謀殺します。これを境に、およそ30年間にわたり、おもに下野国・常陸国・下総国・上総国・安房国を勢力範囲とした「古河公方・伝統的豪族勢力の連合軍」と、おもに上野国・武蔵国・相模国・伊豆国を勢力範囲とした「幕府・堀越公方・関東管領山内上杉氏・扇谷上杉氏連合勢力」とが、関東を東西に二分して戦うことになりました。

（享徳の乱 1455～1483年）

この戦が関東地方の戦国時代の幕開けと言われます。したがって関東地方の戦国時代は、応仁の乱の勃発より10年以上前に始まったこととなります。

この状況に対して足利幕府は新たな公方を送り込みますが、戦乱状態にあった鎌倉に入らず伊豆半島に止まります（堀越公方（ほりごえくぼう）：1457年）。また、幕府の命により駿河の今川氏が、反乱公方の討伐のため鎌倉に入ります。このため五代目公方は、鎌倉を捨てて、その後古河（茨城）を拠点とすることになったので、古河公方と呼ばれます。足利幕府は反乱公方を退治することができないまま、この戦乱が終わると古河公方を認めることとなります（1483年）。

2 関東の戦国時代の主役

第一の主役の「関東公方」（鎌倉公方、古河公方を含めた総称）は、幕府の地方機関として権威だけを持ったお公家さんでした。都の権威ある代表ですから、権力志向が高く、このため周囲の勢力を引き付け、また神輿に乗りやすい体質であったと思います。

それにしても、古河公方が生き残ったこと自体、不思議なことです。徳川幕府時代でも特別な藩（喜連川）として生き残ります。お公家さんを大事にする何かが民族の血の中にあるのでしょうか？

第2の主役は、第1の主役・公方の補佐役である「関東管領」です。この職は上杉家が担っていたのですが、この一家は完全に一枚岩ではなく、「山内上杉家」と「扇谷上杉家」に分かれていて、山内家が主家筋なのですが、ときに両家は戦闘を交えます。

（山内はやまのうち、扇谷はおおぎやつと読みます。）

関東管領職の任命権を足利幕府が握っていたようで、公方と幕府が衝突したときに関東管領が幕府側に付くと、公方と関東管領が戦うという構図が生まれました。両上杉家ともに関東平野を治める強力な武士集団でしたから、公方としては頼りにしていたと思います。

第3の主役は、小山氏・結城氏・宇都宮氏・千葉氏・那須氏・佐竹氏、小田氏等の地方豪族です。公方が幕府や関東管領家と対立する図式を選ぼうとするときは、地方豪族を味方に付ける必要がありました。

これらの3者が入り乱れて戦いを続けることになります。

長い戦乱のなかで、「関東管領」である山内上杉家に内紛が発生します。反乱を企てたのは「長尾景春」という武将で、上杉家が本拠としていた五十五城（埼玉県本庄市：いかっこ）を襲い、本家の山内家、扇谷家は上野などへ敗走します。（1476～1478年：長尾景春の乱）

このときに長尾景春が反乱の準備をととのえたのが鉢形城であり、鉢形城を築城した人として伝えられます。

長尾家は、代々関東管領家の執事（家宰：かさい）を勤めていた家柄でしたが、父親の死後自分が跡継ぎに指名されなかったことに対して反乱を起こしました。景春の部下だけでなく関東地方の多くの武士団が景春を応援したので、地方豪族を巻き込み山内家を二分する戦となりました。古河公方が景春に加担したので、さらに戦いは混乱します。

景春は、反乱に先立って親戚筋にあたる「太田道灌」に謀反を打ち明け、賛同を得ようとしたのですが、かなわず逆に道灌によって攻撃を受け、ついには鉢形城を追われます。

「太田道灌」は江戸城の築城者として、また、岩付（岩槻）城主として知られます。道灌は戦略家として優れた人物でしたので大きな実績をあげましたが、主君がそれを逆に妬み、最後は風呂に入っていたところを襲われ落命しました。（1486年）

その後の景春は、関東各地を転戦したようです。

長尾景春の乱の鎮圧によって、関東の戦乱状態は一段落します。景春のいなくなった鉢形城に入城したのは、景春の本家の山内上杉家の当主・関東管領である上杉顕定でした。

鉢形城が北条の勢力下になるまで、この地域は山内上杉の領地でした。

しかし、「享徳の乱」の後、両上杉家の間ではその論功に不公平感が広がり、ついに1487～1505年両家の争いとなります。（長享の乱）

また、古河公方の内部でも紛争が起こりました。（1509～1518年）

関東地方が戦乱に明け暮れている間に、西から新勢力がひたひたと迫ってきました。

3 小田原北条氏

関東の戦乱状態を平定したのは、小田原北条氏でした。鎌倉幕府の執権職であった「北条氏」に対して、小田原北条氏を「後北条氏」（後の時代の）と呼ぶことがあります。

初代は北条早雲（伊勢新九郎盛時:伊勢宗瑞）です。駿河の今川氏を助けた功により興国寺城（沼津市）を与えられます。ここから堀越公方が領有していた伊豆半島の攻略

（1492年）をはじめに、ついには小田原進出を果たします（1495年）。時の小田原城主は扇谷方の「大森氏」で、さらに三浦半島を支配していた「三浦氏」も滅ぼし、相模を手中に収めて大名になります（1516年）。

早雲は前段で取り上げた反乱を起こした「景春」とも手を結んだこともあるようです。1518年早雲の嫡男「氏綱」が当主に代わり、1541年には「氏康」が3代目を継ぎます。

（1）河越夜戦と扇谷家の滅亡

もともと河越城は扇谷家の城でしたが、後北条氏に占拠されたので、これを奪還するため1545年両上杉家がこれを包囲します。古河公方も北条氏の北上を阻止するために包囲軍に参戦しますが、氏康が援軍8千を率いて8万の連合軍を破ることになります。これが「河越夜戦」です。この戦で扇谷家の当主が戦死し、扇谷上杉家は消滅します。

（2）公家・関東管領時代の終焉

後北条氏は、小田原を拠点に関東を納めます。もともと、肥沃で温暖な関東平野は、周囲の甲斐武田、信州、越後に常に狙われていましたので、武力と婚姻を柱にした外交関係を築きながら安定を図ります。たとえば1554年に氏康は、甲斐の武田、駿河の今川と「甲相駿三国同盟」を結びます。これによって氏康は、関東の戦いに専念できたといわれています。

1552年氏康は、平井城（群馬県藤岡）に関東管領（上杉憲政）を攻略し、公家・関東管領体制は事実上崩壊します。

（3）戦国時代

1559年、三代「氏康」は家督を「氏政」に譲ります。小田原城下は大いに栄えたそうですが、常に安定していたわけではありませんでした。1561年には、越後の上杉謙信は遠路遠征して小田原城を包囲しました。また、1569年には武田信玄によって包囲されました。これらに対して小田原城は籠城によって切り抜けました。

四代氏政の時代は、武田が織田と戦って敗れた「長篠の戦い」（1575年）、越後では上杉謙信没後の内乱、織田による武田攻め（1582年）、本能寺の変など戦国絵巻の中に出てくる時代でした。氏政は、上野、下野、常陸とその版図を広げました。

（4）小田原評定

五代「氏直」の正室には、徳川家康の娘が嫁ぎます。四代氏政は、家督を氏直に譲った後も小田原城落城のときまで実権を持ち続けます。

秀吉が、信長の跡をついで天下を平定すると、関東惣無事令が出され私戦が禁止されますが、小田原では戦いに備えて城下を取り囲む大外郭（惣構）を建設して戦いに備えます。

秀吉は1588年、聚楽第の花見を催し大名の列席を求め、忠誠を誓わそうとしますが、氏政の反対で氏直は上洛を果たせませんでした。

4 鉢形城落城

ときの鉢形城城主は、三代氏康四男の「北条氏邦」でした。これ以前に、この地方を治めていたのは「藤田」氏であり、氏邦の正室「御福御前」は藤田の娘でした。つまり北条家は、この地方を「婿入り」で手に入れました。したがって、氏邦は、はじめは藤田氏邦を名乗っています。同様に、氏邦の兄・氏照は八王子城主ですが、大石氏を名乗りました。「氏邦」は、鉢形城の大規模な改修工事を行い、現在の規模になったと考えられます。

秀吉との間が険悪になっているなかで、1589年北条氏邦の家臣である猪俣憲直が上野国において真田昌幸の支城である名胡桃（なぐるみ）城（沼田市）を奪取するという事件が起こります。これが秀吉に小田原攻め開始の口実を与えたこととなります。

小田原評定で結論が出ないまま籠城をむかえ、出撃を主張していた鉢形城主氏邦は直前に自城へ戻ります。小田原城は秀吉の20万の大群に包囲されます。

一方、鉢形城には3500人が籠城して備えますが、東からは前田利家、南からは上杉景勝、西からは本田忠勝、北からは真田に攻められます。攻撃は5月19日にはじまり6月14日には落城します。とくに本田忠勝が南の車山に置いた28人持ちの大砲が、城を破壊したことによって士気が下がったと伝えられます。

さて、城主氏邦と正室・御福御前のその後ですが、御福御前の実弟が前田家の家来になり、この戦にも加わっており、その縁で氏邦は家臣とともに越前に向かい、その地で穏やかな終焉をむかえました。御福御前は落城前に寺に逃げますが、その後自害したと伝えられています。

氏邦には、光福丸という遺児があり、藤田家以来の旧臣が養育しますが、早世したため鉢形北条の一族は滅亡します。